



三到図書館 ニュース

2014年10月発行
No.75

J. F. Oberlin University Library

- ◇巻頭メッセージ ◇教員からのメッセージ ◇学生からのメッセージ ◇選書ツアー報告
◇読書運動プロジェクト ◇図書館からの報告 ◇図書館からのお知らせ

📖 巻頭メッセージ

芸術体験のはじまりーひとりで過ごす豊かな時間

芸術文化学群教授・オルガニスト 横山 正子

「本を読もう。
もっと本を読もう。
もっともっと本を読もう。」

これは長田弘さんの詩「世界は一冊の本」の冒頭です。ずいぶん前になりますが、「三年B組金八先生」の中で取り上げられて話題になりました。ご存知のように、金八先生は国語の先生です。じつは私も中学生のころから国語の先生になりたいと思っていました。本が大好きだったからです。夢の実現のため、大学では教員免許も取得しました。その後思いもかけない出会いがあって音楽の道へ方向転換してしまいましたが、私という個人を形成している多くの要素の中には、国語の先生を志した経験が大きな割合を占めていると感じています。中学、高校の時の私は、一年間に自分の身長cm分の冊数を読むというマイプロジェクトを貫いていました。中一の時すでに身長160cmを越えていたものですから、六年間、二日に一冊のペースで読破していたこととなります。人並みに部活もしていましたが、少しでも暇があれば本の世界に引きこもってしまう私は、夜更かし族で、お世辞にも友達づきあいの良い子どもとはいえませんでした。そして、学校の図書館こそは最も落ち着く場所でした。

図書館で本を読む時間、それはたったひとりで、本に囲まれて過ごす時間です。本の中の異世界に入り込み、今現在いる場所を離れ、今の自分自身をも離れて飛翔していく時間です。そして、現実の生活では得ることのできないさまざまな体験を重ね、自分が形成されていきます。それは芸術の世界とよく似ています。芸術にかかわる人は、たとえ演劇や管弦楽団のように大勢の力を結集して公演するもので

あっても、ひとりひとり各々の技能を、責任もって磨かなければなりません。芸術に携わるのは、言い換えれば「ここではないどこか」に没入していくことです。「飛び立つ者」として芸術の翼をわがものにするには、ひとり己と向き合い、

己の現在の力を知り、地道に鍛錬していくことが避けて通れない道といえるでしょう。もちろん、人間は自分を取り囲む環境の中で、人々と共生することによって成長します。他者とどのようにコミュニケーションをとるか、その能力のあるなしがその人の社会性や協調性を左右するようにさえ思われます。しかし、適切なコミュニケーションを図ることのできる人になるためには、まずひとりでいる時間を豊かに過ごせる人になることが重要です。図書館で静かに本を読む時間は、もっとも身近な形でその手助けをしてくれることうけあいです。

さらに図書館に隣接する情報メディア室には、あらゆる分野のCDやDVDが集められています。ブースに身を置き、ヘッドフォンをつけてじっくりと鑑賞してください。観たかった映画、演劇、オペラの名演を思う存分浴びるように楽しむことができるのは、学生時代をおいてほかにはありません。

芸術の秋、図書館で過ごす時間を増やしてみませんか。授業の空き時間、このコマは図書館かメディア室で過ごす、と決めてみましょう。古今東西の文学や音楽、演劇や美術、映画の世界に浸る、そんな体験がきっとみなさんの大きな財産となり、考え深い知的な人格を作ってくれるに違いありません。



ことばの演奏法を獲得するために

リベラルアーツ学群准教授 岡田 万里子

川崎九淵^{きゅうえん}の名を知る人は、今ではもうほとんどないと言っていいでしょう。存命中の昭和31年でさえも、武智鉄二^{たけち}*が「川崎九淵の名を知らなくても、誰もたいして不思議とは思わない。むしろ知っていたら、若いくせに変な奴のことを知っていると言われて笑われるかもしれない」と書いたほどの、俗世間を超越した芸術家でした。

今、私は、この変わった芸術家の言葉を、『川崎九淵著作集』（花もよ編集室発行、2014年10月刊行）として、再び世の中に甦らせたいと思っています。なぜなら、九淵の文章からは、明治・大正・昭和と激動の時代にありながら地に足をつけ、しっかりと物事を考えた人物の生き様を読み取ることができ、それは揺らぐ現代において必ずや道を照らしてくれると信じるからです。

川崎九淵は、日本の伝統演劇である能の音楽を担当する囃子方、その中でも特に「大鼓」という重要で地味な楽器の演奏家でした。明治7年に四国の松山に生まれ、同級生に高浜虚子がいました。26歳で上京し、当時随一の名人津村又喜に師事して、以後専門的な能の大鼓方となります。ところが、上京の翌年、九淵は師匠を病気で亡くしてしまいました。それからは、他の囃子方や能に携わる様々な人に導かれ、自らも研究を続けて能の大鼓を極めて行きます。彼の芸は誰もが認めるところとなり、能の囃子方として初めての芸術院会員となり、重要無形文化財保持者いわゆる人間国宝にも認定され、日本の芸術家としての栄誉を極めます。昭和31年に惜しまれつつ引退し、同36年、86歳で亡くなりました。

九淵は、技芸に優れていたばかりでなく、能の音楽の理論を解明し、能楽論や芸術論も展開しました。その言論は柔軟で建設的で、冷静でありながら芸術に対する慈愛に満ちています。どうして彼は、真っ当に正面から物事を見据え、議論を構築することができたのかと、私は驚嘆して彼の書いた物を読みました。一つには、当時の能楽界は盛んで、複数の雑誌が刊行され、信頼ある議論の場が確保されていたこと、そうしてもう一つに、九淵が読書家であったことによるものと思うようになりました。

ここでは、二番目の方に注目してみましょう。九淵の三女の勝子さんは、「父」という文章で、九淵は読書を好み、『老子』『論語』『春秋』『史記』といった中国の書物、それに若い頃は翻訳物『デカメロン』や『虚栄の市』なども読んでいたと書いています。なるほど、やはり多彩なインプットが、厳選されたアウトプットを支えていたのです。



私は、大学生の時に渡部直巳先生の文芸批評の授業をとっていたことを思い出しました。そこでたくさん本に触れたからです。作者の死、テキスト論といった構造分析的な授業はとても難しく感じられましたが、先生が薦めてくださる本とその読み方は面白く、たとえば小説の神様といわれる志賀直哉の短編を万年筆で原稿用紙に写すということもしていました。読むだけでなく、手で書き写すことによって、文章の構成や言葉の使い方が鮮明に見えてきたことを覚えています。渡部先生がどんな本を薦めてくださったのか、その頃のノートは出てこないのですが、12年前に共著で『必読書150』（太田出版、2002年）を出されています。大変に重厚なリストですが、みなさんも是非手にとってみて下さい。

すなわち、九淵の生きた音楽世界だけでなく、世界では様々なことが起き、人々はいろいろなことを考えますが、結局はそれを言語化しなくては、世界に残らないし、他の人にはわかりません。九淵は、能の音楽を可視化するとともに、自分の思考の言語による思想化にも成功しました。つまり、大量の読書を通じて、大鼓だけでなく、それだけの言語の演奏方法も修めたということでしょう。大学に在籍されるみなさんには、是非、その言語の演奏方法を身につけていただきたい。そのためには、たくさん本を読み、時には手で書き写すことをおすすめします。

* 武智鉄二は、芝居や映画をつくり、伝統芸能のパトロンでもあった、精力的に活躍をした演劇評論家です。武智の最後の弟子である松井今朝子さんの『師父の遺言』（NHK出版、2014年）がおすすめです。

 学生からのメッセージ

総合文化学群学生としてどのように図書館を利用してきたか

皆さんは図書館をどのように利用していますか？他の学生がどのように利用しているか気になりませんか？今回の図書館ニュース「2013年度図書館メディアセンター報告（p7）」でも分かるように、総合文化学群／芸術文化学群の学生は図書館をよく利用していることがわかります。

今回は「芸術の秋」をテーマに総合文化学群4年生の学生に声をかけ、お二人にどのように図書館を利用してきたかを書いてもらいました。皆さんもぜひ参考にしてみてくださいはいかがでしょうか。

演	劇	と
図	書	館



総合文化学群4年 演劇専修 後藤由貴

「演劇と図書館はどんな関係があるの？」と思う人もいるのではないのでしょうか。総合文化学群の学生は図書館を使うことはあるのかと尋ねられることもあります。そこで今回私がどのように利用してきたのか書いてみようと思います。

大学に入学したばかりの私は、本を読むのが好きでしたので、図書館内を探検し、その蔵書数にただただ驚いていました。ジャンルを問わず自分の読みたい本をひたすら読み続ける日が続きました。そして図書館で読んだ本の内容を元にして授業内の発表や制作を行ったこともあり、私は本を読むことで自分の中の引き出しが増えていくことや、それを別の機会に活かすことができることを改めて知りました。

私が演劇を直接のテーマとした本に手を伸ばしたのは、3年次にゼミの研究テーマを設定したことがきっかけです。私の研究テーマが芸術の普及活動や子ども・親子を対象としたアート関連企画であったため、関係のある演劇、音楽、美術といった各芸術分野の普及活動に関係する本を中心に読みました。書店や公共の図書館に置いてある演劇をテーマとした本は、戯曲や西洋・日本の演劇の歴史、演技論に関する本が中心となり、公共ホールや芸術の普及活動に関する記述のある本は数が少ないという現状があります。しかしながら三到図書館には、多くの芸術普及や子ども対象のアート関連企画の本があったため、連日通い詰めて利用し続けました。

また、本を借りるだけでなく、授業の空き時間に勉強をしたりするなど、私は空き時間だから図書館へ行こうと考えることがとても多いです。学群というくくりがなく、自分自身の読みたいと思う本を読むことが出来る、自分の知らなかった本をいろんな人からのおすすめで知ることが出来るこの場所が、私は好きです。皆さんも是非図書館で様々な本に手を伸ばしてみてください。

好	奇	心	を			
発	散	で	き	る	場	所



総合文化学群4年 演劇専修 中村 汐里

図書館は私にとって最高に“贅沢”な場所だ。なにが“贅沢”か簡潔に述べると「快適な環境で、読みたい本を読みたいだけ読める」ということだ。しかも「タダ」で。タダと言うと聞こえが悪いので言い換えると「無料で膨大な知識や情報を得ることができる」のである。あまり変わらないだろうか。それでも文字通りには違いない。

総合文化学群、特に演劇専修の講義には作品名をはじめ多くの情報が飛び交う。「なんとなく知っています」で済ませることはもったいないと感じていた私は図書館へ行き、講義で受けた好奇心のまま本を借りて読んだ。戯曲だけではなく、あらゆるジャンルの本を借りて帰った。抱えるほど借りてもお金がかからないので読みたい気持ちを抑える必要がない。手当たり次第貪るように読んでも許される、本好きには天国のような環境である。その功名か、講義の内容をより深く楽しめるようになった。また戯曲読解にも図書館の資料は大いに役立つ。自分が納得のいくまで資料を読み漁ろうが、咎められはしない。図書館は知的探究心を贅沢にふるえる場所なのだ。

また「行ったことの無い階を探索してみる」ことも、図書館の楽しみ方の1つとして提案したい。我々総合文化学群生ならば5階の文学コーナーによく通うように、自分が学ぶ分野の本ばかり借りがちである。勿論それでもかまわないのだが、時々普段行かない階に行ってみただけで新たな発見ができる。例えば5階で外国文学を読んだ後に、4階でその国の文化や生活についての本を探してみるとより作品を楽しめるのではないだろうか。或いは就活に疲れた時、4階の労働分野のコーナーに行ってみることをお勧めする。私はそこで就活の鬱憤を晴らすような一冊と運命的に出会った。このように全く興味がないと思っていた分野にも、自分のお気に入りになるであろう一冊が潜んでいることもある。好奇心を存分に発散できる場所、図書館を隅々まで探索してほしい。

選書ツアー報告

「学生選書ツアー」を開催しました

2014年8月6日@神田神保町

本の街と言われている神田神保町にて、2014年8月6日（水）に、「学生選書ツアー」を開催しました。

他大学では毎年恒例のイベントとして行なっているところもありますが、本学では初めての開催となりました。6月下旬から7月上旬にかけて図書館のHPやポスターなどで参加の呼びかけをして、募集期間内に応募してくれてきた計14名が参加しました。（今回の対象は学群生で、総合文化・健康福祉・ビジネスマネジメント・リベラルアーツの各学群から参加がありました）



第1回の学生選書ツアーの舞台となった三省堂書店神保町本店



最後に、選んだ本のリストをチェックして、感想を記入しました



学生のみなさんが選書ツアーに参加したきっかけは、「本が好きだから」ということにとどまらず、「大学図書館の本を選ぶことに関わってみたい」「図書館の本がどうやって選ばれるか知りたい」「司書の資格をとりたから」「理系の本を充実させたい（リベラルアーツ学群の理数系の学生）」「芸術系の本を充実させたい（総合文化学群の学生）」と様々でした。



選書ツアーとは、簡単に説明すると、書店の本棚で自由に本に触れて・見て・読んで、大学の図書館に蔵書として入れたら良いと思う本を選んでいくというものです。「この本を図書館に入れたい!」「この本は他の学生にも読んでほしい!」と思った本を買い物かごに次々と入れていく、というイメージです。本は冊数が多くなると結構な重さになることや、選んだ本のデータ集計の手間などを考えて、実際の作業は、気に入った本のバーコード部分を専用の読み取り機で読み取っていく、というかたちで行ないました。

三省堂書店の1階から6階の店舗フロアで、小型の「豆っぴ」という読み取り機を用いて、約2時間の所要時間内に選びました。本を選び終えた後は、7階の事務所フロアの控え室にて、「豆っぴ」で読み取った本のリストを確認しました。

また、副店長の藤原さんに、店舗フロアの一部と、地下1階にある仕入れフロアを案内していただきました。仕入れフロアは、通常は立ち入ることができない場所ということもあり、学生たちから活発な質問が出ました。

1階~6階の各フロアに散らばって、参加者それぞれの視点で選書しました



選書を終えた後は、副店長さんから店舗フロアと仕入れフロアの説明を受けました



2014
8.6
Wednesday

選書ツアー後の感想としては、大半の学生が、「読む人が自分だけではない」「予算の額も個人の買い物よりは大きい」「自分の選んだ本が大学図書館の蔵書になる」といった、個人で本を選んで買う場合との違いを感じたようでした。そして、自分以外の多くの学生にこの本を読んでほしいという視点で選んだことや、自分が選んだ本が図書館の本棚に並ぶことを考えると、楽しくもあり難しくもあり、また、恥ずかしさや照れも感じたということでした。本を選ぶ過程で、自分の興味にとどまらず、今まで自分が興味がなかった分野に足を踏み入れてみたり、こんな本があったのかと感じたり、学生たちはそれぞれに多々感じる場所があったようです。日ごろ本を読む機会のない学生にこそ、このような選書ツアーに参加してもらおうと良いのではないかと、という意見・提案もありました。参加してくれた学生たちは、色々なことを感じて考えてくれたようです。

私たち図書館の職員は、日々の本の返却作業や蔵書整理などを通じて、学生のみなさんによく借りられている本の傾向というのはだいたいわかってきますが、何十万冊という本のある図書館ですので、たまに、「こんな本があったのか」というものに出会うこともあります。そんな時は、その本の目次を見たり、その本の周辺にはどんな本があるのか見てしまうこともあります。

この図書館ニュースがみなさまのお手で読まれる頃には、学生たちが選書ツアーで選んだ本が、学生たちの手作りの紹介のPOPとともに、三到図書館（図書館本館）3階の入口付近に展示されているはずです。図書館を利用する際には、足をとめてぜひ見ていただければと思います。

図書館にあったら良いと思う本、図書館で読みたい本ということに関連して、学生のみなさんにぜひ知っておいていただきたいのは、購入希望（公立図書館などでは、リクエストと呼ばれています）の制度です。

桜美林大学の図書館には、みなさんが読みたいと思って希望を出した本を大学の予算で購入し、希望を出した人が最初に読めるという制度があります。大学生は1年間に10冊まで、大学院生は1年間に30冊まで、希望を出すことができます。本だけでなくDVDやCDなどについても、1年間に3点まで出すことができます。例えば、「ゼミの発表や課題のために読まなければいけないけど、個人で購入するにはちょっと高いなあ…」と思うような本や、自分の手元になくても1回読めればそれで十分と思う本などは、この購入希望の制度をぜひ利用してください。みなさんが希望を出したものは、原則として購入しています。ただし、マンガ本、サブカルチャーの本など、大学の図書館に入れる本としてふさわしくないと判断されるものはお断りする場合があります。申込は、図書館のHPのマイライブラリからできますが、やり方がわからない場合等は、図書館の職員にたずねてください。



(図書館メディアセンター 担当係長 三上 彰)

読書運動プロジェクト

図書館読書運動プロジェクト活動報告

「今年の読プロは随分活発ですね」と度々図書館職員の話題に上るほど、今年度の読書運動プロジェクト（以下、読プロ）の活動は多岐に渡っています。

恒例となった3階入口の“読プロ棚”では、これまで同様読プロのメンバーがテーマを決めて本を展示しています。この棚の位置は元々目に付きやすいということもありますが、学生の視点から選ばれた本がおかれているからでしょうか、かなり高い貸出率を誇っています。現在も一部展示されている「薄くて濃い本」というテーマでの貸出冊数のランキングは以下の通りです。



テーマ「薄くて濃い本」貸出ランキング 集計期間 2014年4月10日～8月31日			貸出回数
順位	書籍名 / 著者名 / 出版社		
1	レインツリーの国 / 有川浩 / 新潮社 (新潮文庫)		24
2	先送りせずにはすぐやる人になる方法 / 佐々木正悟 / 中経出版 (中経の文庫)		22
3	99・9%は仮説: 思いこみで判断しないための考え方 / 竹内薫 / 光文社 (光文社新書)		18
3	第七官界彷徨 / 尾崎翠 / 河出書房新社 (河出文庫)		18
5	ハツカネズミと人間 / スタインバック / 新潮社 (新潮文庫)		14
5	斎藤孝の企画塾: これでアイデアがドンドン浮かぶ! / 斎藤孝 / 筑摩書房 (ちくま文庫)		14
7	遺体: 震災、津波の果てに / 石井光太 / 新潮社 (新潮文庫)		13
7	外国語をはじめの前に / 黒田龍之介 / 筑摩書房 (ちくまプリマー新書)		13
7	黒蜥蜴 / 江戸川乱歩 / KADOKAWA (角川ホラー文庫)		13
10	嘘つきアーニャの真っ赤な真実 / 米原万里 / 角川書店 (角川文庫)		12
10	欲望という名の電車 / T.ウィリアムズ / 新潮社 (新潮文庫)		12


ランキングを見ると、自己啓発本が上位に多いですね。そして小説類は“濃い”をテーマにしているだけあって、あまり耳なじみのない本が多いようですが、こちらも健闘しています。

現在この棚は、読プロメンバーが有川浩著の「図書館戦争シリーズ」を表紙・登場人物・背景といった様々な角度から捉え、それらに関連する本をメインで紹介・展示しています。上記ランキング1位の『レインツリーの国』は「図書館戦争シリーズ」第2弾の『図書館内乱』で登場していますので、興味のある方は両方読んでみてください。


また、入口の棚以外にも、新潮文庫棚（三到図書館5F）の飾り付けや選定も、この読プロの皆さんが行っています。今年度から優秀な美術担当のメンバーが加わり、ポップ（書店で本の側に置いている本の紹介文）の質が一層向上しました。

ここまで紹介した活動以外にも他大学の学生との交流、「本の音～ほんのーと」というWEBラジオの発信、ボランティアフェスタや生協とのコラボ、屋外公開ミーティングと様々な活動を行っている読プロメンバーたち。1年最大のイベントである「コメント大賞授賞式」はもちろんのこと、今後も色々なところへの進出やアピールを企てているとのことですので、注目しててください。私たち図書館職員も応援しています。

最後に読プロメンバーから一言いただいていますのでご紹介します。（図書館メディアセンター 鬼沢 恵子）





**読プロメンバー
から一言**



今年の読プロも元気いっぱい、真剣に活動しております！企画の「薄くて濃い本」、「新潮文庫 ver. 桜美林図書館」などなど企画目白押しです。「薄くて濃い本」はたくさんの方々に借りていただいているようでうれしい限りです。図書館職員の方からも推薦していただいているので是非、200ページの濃い物語を味わってください！（リベラルアーツ学群3年 / 山中きりん）

読プロの活動の幅は無限大。年に一度のビッグイベントであるコメント大賞の表彰式や毎月恒例の読書会、図書館・生協との企画、他大学との交流、さらにはTwitterやWEBラジオ...。どれも読プロメンバーの熱意で満ち溢れています。読書を通して新たな世界が広がる場所。忙しくも充実した毎日がある場所。それが読プロです。
（リベラルアーツ学群2年 / 芳賀遥）

みんなが言っている通り、日々頑張って活動しています。図書館の職員さんには度々お世話になり、感謝感謝の毎日です。読プロに関わってくださっている皆さまのご協力のもと、今年も読プロは成長していきます。成長に必要なのは向上心。向上心を裏付けるのは何かをしたいという欲求。欲求を満たしたい方は「読プロ」で検索をお願いします。
（総合文化学群3年 / 読プロ代表 酒井明砂子）

2013年度 図書館メディアセンター報告



2013年度の図書館メディアセンター活動について、簡単に報告します。図書館利用傾向は、2012年度に比べて全体的に利用（入館、貸出）が減少となりました（表1）。全体の入館者数は123,465人（2012年度127,634人。カッコ内前年度。以下同じ）で-3.3%、貸出人数は28,326人（29,542人）で-2.8%となりましたが、資料の貸出冊（点）数は65,924冊（67,028冊）で-0.6%にとどまりました。これを学生の利用（表1①～⑥）という観点から見てみると、学生数は8,770人（8,964人）で-2.2%、入館者は108,024人（111,720人）で-3.3%、貸出人数は23,565人（24,243人）で-2.8%ですが、資料の貸出冊（点）数は54,588冊（54,906冊）で、こちらも-0.6%にとどまりました。図書館に来る学生の人数は前年度に比べて減ったものの、学生1人あたりの貸出冊数は2012年度が6.1冊に対して2013年度が6.2冊と、逆に増えるという結果になりました。データで見る限り、図書館の資料を多く利用する学生が増えたようです。とはいうものの、利用率ばかりあげるのではなく、全体の利用数を増やしていかなくてはなりません。また教職員の図書館利用を見ると、入館者、貸出人数、冊（点）数とも前年度を上回っていますが、内訳を見ると教員の数値が約10%増加しており、職員は前年度並みとなっています。

(表1)	学生数(5/1)		入館者数		貸出人数		貸出冊数	
	2013	2012	2013	2012	2013	2012	2013	2012
2013年度図書館利用状況	2013	2012	2013	2012	2013	2012	2013	2012
① 芸術文化学群	1,024	1,064	9,699	10,767	2,401	2,689	5,630	5,881
② 健康福祉学群	902	948	10,972	11,232	1,267	1,247	2,477	2,502
③ ビジネスマネジメント学群	1,971	2,005	14,127	15,989	2,480	2,545	5,339	5,231
④ リベラルアーツ学群	4,493	4,566	60,112	59,646	14,602	14,638	33,642	32,575
⑤ その他学部	3	13	4	32	0	2	0	14
⑥ 大学院	377	368	13,110	14,086	2,815	3,124	7,500	8,717
学群、大学院等合計	8,770	8,964	108,024	111,752	23,565	24,245	54,588	54,920
⑦ 学部定員外(聴講生等)	—	—	2,726	3,491	412	605	827	1,579
⑧ 大学院定員外(聴講生等)	—	—	974	2,009	248	344	700	890
⑨ 教職員	—	—	5,488	4,947	2,946	2,891	7,462	6,963
⑩ 卒業生、地域開放等	—	—	6,253	5,435	1,155	1,457	2,347	2,676
合計			123,465	127,634	28,326	29,542	65,924	67,028

学生は図書、雑誌、視聴覚資料（DVD等）をそれぞれどれくらい使っているのでしょうか？（表2）殆どの学生が図書を借りて読んでいますが、近年、視聴覚資料の利用も増えてきています。これは学生のみならず教職員を含めた全体的な傾向といえるでしょう。また、授業で映像資料を活用する教員が増えてきているのではないかと思います。

芸術文化学群の学生で顕著なのが視聴覚資料の利用です。学群ごとの図書、雑誌、視聴覚資料貸出数の内訳を見ると、芸術文化学群の学生は図書75.4%（4,246冊）、雑誌1.4%（79冊）、視聴覚資料23.2%（1,305点）と視聴覚資料利用の割合が突出しています。映画専修、演劇専修など活字情報以外の資料も使う専修ならではのようです。それでは芸術文化学群の学生は、活字をあまり読まないのかと言うと、実は図書の1人あたりの冊数（4.1冊）もリベラルアーツ学群（7.0冊）に次いで多く、映像にも活字にもよく接していることが窺えます。雑誌をよく利用するのはビジネスマネジメント学群であることもわかります。他の学群が1.2～1.4%なのに対し2.7%（144冊）と倍近いデータが出ています。やはりビジネスという専門領域を学んでいる以上、新しい情報を得るためのツールとして雑誌を活用しているといえるでしょう。また学生1人あたりの貸出冊数（視聴覚含む）は、芸術文化学群5.5冊、健康福祉学群2.7冊、ビジネスマネジメント学群2.7冊、リベラルアーツ学群7.5冊、そして大学院19.9冊となっています。

(表2) 学群・大学院の資料別貸出冊(点)数内訳	学生数 2013/5/1	図書		雑誌		視聴覚		合計	
		冊数	割合	冊数	割合	点数	割合	冊(点)数	割合
① 芸術文化学群	1,024	4,246	75.4%	79	1.4%	1,305	23.2%	5,630	100.0%
② 健康福祉学群	902	2,375	95.9%	30	1.2%	72	2.9%	2,477	100.0%
③ ビジネスマネジメント学群	1,971	5,063	94.8%	144	2.7%	132	2.5%	5,339	100.0%
④ リベラルアーツ学群	4,493	31,745	94.4%	423	1.3%	1,474	4.4%	33,642	100.0%
⑤ その他学部	3	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
⑥ 大学院	377	7,408	98.8%	61	0.8%	31	0.4%	7,500	100.0%
学群、大学院等合計	8,770	50,837	93.1%	737	1.4%	3,014	5.5%	54,588	100.0%

データベースの利用は2012年度に比べて減少傾向になりました。利用統計から見て2012年度よりも数値が増加した（利用された）ものは「毎索（毎日新聞記事検索）」「magazineplus（雑誌記事索引データベース）」「Britannica Online Japan」 「OED（Oxford English Dictionary）」 「MathScinet」となっています。その他は利用回数が減少となっていますが、学術論文、各種統計、辞書・事典、新聞記事検索など、またそれらの一次情報、二次情報データベースも含めて、これらの電子情報の利用が大学の学びや研究に大きく寄与していることを考えると、図書館メディアセンターとしても紹介や普及の機会をより多く作らなければなりません。

図書館を有効に使ってもらうための利用ガイダンスも行いました。クラスごとのガイダンスは「リベラルアーツセミナー」で64クラス、870名、「ビジネスの基礎」で24クラス、355名に対して実施、オリエンテーションでは芸術文化学群、健康福祉学群、大学院、留学生別科などに対して実施しました。また中級以上の情報検索ガイダンスは30クラス、566名に対して実施し、個人申込みの利用ガイダンス、卒業論文・卒業研究作成支援も実施しました。（図書館メディアセンター 課長 佐々木俊介）

2014年度 春学期 図書館オリエンテーション・ガイダンス実施報告



2014年度春学期は、オリエンテーション期間中に各学群の新入生約800名に対して図書館の利用方法について説明しました。4月から7月は、リベラルアーツ学群とビジネスマネジメント学群の1年生を対象に、図書館ツアー、蔵書検索・新聞記事検索の説明と検索実習を行いました。そのほか、個人向けにテーマ別のガイダンスを開催しました。今回はテーマごとの時間を設定せずに、申込者の希望に沿った形をとりました。以前よりも参加しやすくなったのではないかと感じています。



■オリエンテーション期間に実施

対象者	開催日	時間	参加人数	内容	備考
健康福祉学群	4月 2日(水)	10分程度	約250名	パワーポイントによる図書館利用説明	
RJ留学生	4月 2日(水)	60分間	約48名	パワーポイントによる図書館利用説明と2グループに分かれての図書館ツアー	
芸術文化学群	4月 3日(木)	20～30分程度	約290名	パワーポイントによる図書館利用説明	
留学生別科	4月 3日(木)	60分間	24名	パワーポイントによる図書館利用説明と図書館ツアー	
大学院(全体)	4月 5日(土)	30分程度	約150名	口頭による図書館案内	
大学院(町田キャンパス)	4月 8日(火)	60分間 2回	20名	図書館ツアーと検索実習	自由参加
大学院(四谷キャンパス)	4月 10日(木)	60分間	12名	図書館利用説明と実際にPCを操作しながらの検索説明	



■授業時間に実施

対象者	開催日	時間	参加人数	内容	備考
ビジネスマネジメント学群 フライト・オペレーションコース	4月29日(火)	90分間	1クラス 18名	検索実習、図書館ツアー	
リベラルアーツ学群	4月21日(月) ～7月21日(月)	90分間	66クラス 約938名	検索実習、図書館ツアー	[LAセミナー]の授業で教員が希望するクラスに対して実施
ビジネスマネジメント学群	4月21日(月) ～7月21日(月)	90分間	23クラス 約382名	検索実習、図書館ツアー	[社会人基礎I]の授業で教員が希望するクラスに対して実施
【情報検索ガイダンス】 2年生以上が中心	4月22日(火) ～7月23日(水)	90分間	11クラス 約176名	レポート・論文作成に向けての 検索実習等	教員からの申し込みによりゼミやクラス単位で実施
【個人申込による テーマ別ガイダンス】	6月16日(月) ～6月27日(金)	40分間	4回 11名	図書館探検、本の検索、新聞記事の検索、 雑誌記事の検索、他大学図書館利用法	



■他部署と連携

対象者	開催日	時間	参加人数	内容	備考
留学予定の学生	6月3日(火)	20分間	78名	パワーポイントによる図書館利用説明	LA GO プログラム

◇ 秋学期の図書館ガイダンスについてお知らせします ◇

10月よりレファレンスカウンターでは、個人別に卒業研究・卒業論文作成のための文献や情報の検索方法を紹介する「卒論・卒研作成支援」を行っています。

どうぞお気軽にご利用ください。

(図書館メディアセンター 主任 矢部 知美)



● 編集後記 ●

貧困層に対して蚊帳を売るべきか無料で頒布すべきかについて。無料頒布賛成派は、これは貧困層にとってもよいことだと言う。例えば子どもたちには学校で給食をあげれば、親たちも子どもを学校に通わせ続けたいと思うようになると思う。これに対し反対派は人びと(貧困層)の自由を尊重すべきだと信じており、かれらが欲しないものを無理強いしても無駄。子どもが学校に通いたがらないのは、教育を受けても意味がないと思うからに違いないと考える。(『貧乏人の経済学』アビジット・V・バナジー、エスター・デュプロ著 みすず書房、2012)

私たちは学生たちに対し、読書の必要性を説くが、果たして読書の無理強いはあるのだろうか？彼らにとって読書は「よいこと」であるはずだから「読め」と押し付けているのではないか。本を読むも自由、読まぬも自由。夏目漱石は「吾人は自由を欲して自由を得た。自由を得た結果、不自由を感じて困っている」(『吾輩は猫である』)と書いた。どうやらこのあたりにヒントがありそうだ。(S)